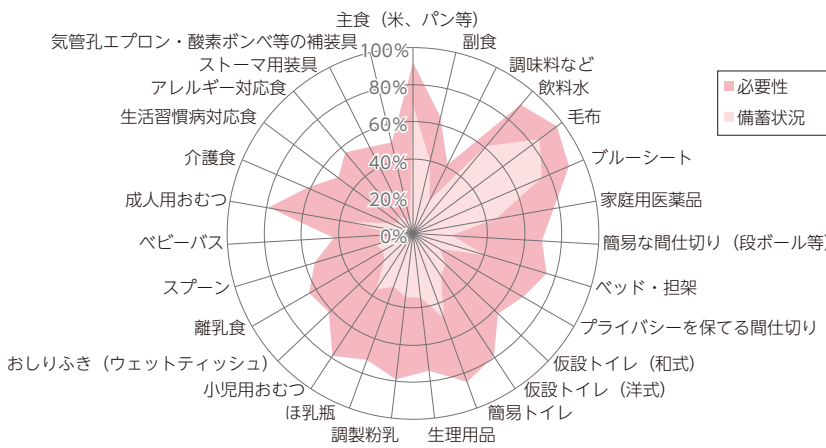
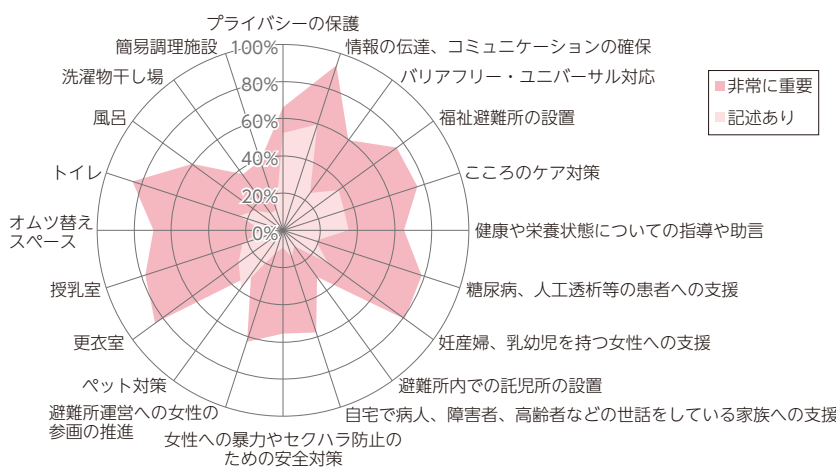


グラフ2 備蓄品：必要性と備蓄状況（対象：1,747市町村）



グラフ3 避難所での取組の重要性と記述の割合（対象：避難所運営マニュアル作成済みの458市町村）



が配られて多数の人がひしめく様子が浮かびますが、今回も、おむつ替えや授乳の必要がある乳幼児の母親たちが周囲を気にしなくてはならなかったり、女性は毛布を被ってその下で着替えなければならなかったりしました。戸外に設けられた仮設のトイレも、夜は暗くて危険だったり、設置場所に配慮が足りず行きにくいところもありました。そのため水分の摂取を

控えトイレを我慢することになりがちで、健康上問題があることも、知られるようになっていいると思います。生理用品の備蓄が相変わらずないとか、女性用の下着はあつなかつたという例も報告されています。避難所とは難を逃れるための場所であるはずなのに、女性たちは、そこでも「難」に遭遇してしまうのです（註4）。

「こんな時に女も男もない？」  
こうした困難な状況に対応して、乳幼児の母親のために別室や授乳スペースが、女性専用の更衣室や洗濯物干し場が、設けられたところもありましたが、プライバシー確保のためにパーティションを入れようとすると、避難所での団結を理由に拒絶されたり、化粧品等の要望は「ぜいたく」だと断られ、「女性の困難」について話

そうとすると「こんな時に女も男もない」と非難されたというお話も、伝わっています。しかしながら、「こんな時に女も男もない」という発言には注意する必要があります。2と3のグラフをみてください（註5）。これは、全国知事会が2008年に行つた地方自治体の防災施策に関する調査の結果ですが、備蓄品は主食や飲料水、毛布、ブルーシートが多く（グラフ2）、パーティション、乳幼児や高齢者、障がいのある人々への配慮がみえませんし、避難所運営マニュアルをもつ数少ない市町村でも、脆弱性をもつ人々への配慮（グラフ3）

については、認識も高いとはいえず、記述も大変わずかです。つまり、日本の防災施策には「偏り」が、災害脆弱性への「鈍感さ」があるのです。これでは、災害対応の初期に、こうした人々への対応が「後回し」になってしまうのも当然であり、女性の要望も「ぜいたく」「余計なこと」とされ、そうした対応が、様々なニーズへの「鈍感さ」であることも、気づかれないでしょう。

どうしてこのようなことが起きてしまうのでしょうか？ それは、防災計画を策定する委員、備品の調達リストをつくり、避難所運営マニュアルを考える担当者が、「健康な、中壮年男性」だからではないのでしょうか？ 女性たちが関わっていないからではないのでしょうか？ それが正しいとすると、「こんな時に女も男もない」という発言、見方の誤りがわかります。こんな時なのに（健康な、中壮年？）男性のことしか考えられていないのが事実なので

註4...その他、炊き出しでの一方的負担や、家庭責任の増大、ストレスによるDV被害や性犯罪被害、雇用での問題などが、阪神淡路大震災以来、指摘されています。  
註5...全国知事会「女性・地域住民からみた防災施策のあり方に関する調査―防災分野における男女共同参画の取組について」<http://www.naga.gr.jp/news/2008/post-336.html>